

Discussion Paper Series

University of Tokyo
Institute of Social Science
Panel Survey

東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト
ディスカッションペーパーシリーズ

若者の多様なキャリアを承認する「自立」観：
親子を対象とした高卒パネル調査インタビューより

Perspective of “Independence” recognizing Various Careers of Young People:
Based on Interview for Parents and Children of the JLPS-H

小山田 建太
(筑波大学大学院)

Kenta Oyamada

June 2019

No.111

若者の多様なキャリアを承認する「自立」観： 親子を対象とした高卒パネル調査インタビューより

小山田建太（筑波大学大学院）

要旨 本稿は、「高校卒業後の生活と意識に関する調査」（高卒パネル調査）の一環として2013～2017年に実施された、対象者の親子へのインタビュー調査データの分析をおこなったものである。

また上記の分析結果に基づき本稿が指摘した知見は主に以下の2点であり、第1に、従来象徴的なメルクマールの獲得を通じた「自立」を期待する社会認識のうちに、「認識論的誤謬」が生じていることが推察された。したがってあらゆる若者による主体的な「自立」の実現を志向する際には、その「自立」を期待する今日の社会認識や社会政策のうちに「認識論的誤謬」が生じている可能性を問い直し、それらを当事者にとっての「自立」の実現に資する社会資源へと変換させていくことが求められる。

第2に、「認識論的誤謬」を克服するための社会認識として、今日の若者が歩む多様なキャリアを承認し、彼らの多様な将来像をも肯定していく「自立」観の必要を見出した。またこのような「自立」観が、当事者のキャリアの“固有性”に肯定的な解釈を加え、彼らに固有の将来像の構築を動機づける社会資源となる可能性が示唆された。

謝辞 本研究は、日本学術振興会（JLPS）科学研究費補助金特別推進研究（25000001, 18H05204）、基盤研究（S）（1810303, 22223005）、基盤研究（C）（25381122）、基盤研究（B）（16H03778）および厚生労働科学研究費補助金政策科学推進事業（H16-政策-018）の助成を受けたものである。東京大学社会科学研究所パネル調査の実施にあたっては、社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けた。パネル調査データの使用にあたっては社会科学研究所パネル調査企画委員会の許可を受けた。

また本インタビュー調査にご協力いただいた皆様に、深く感謝を申し上げます。

1. 親子に模索される若者の「自立」と、その課題

これまでの日本社会では、仕事・家族・教育という3つの社会領域が堅牢な結び付きを保つ「戦後日本型循環モデル」が成立してきたために、若者の「学校から社会へ」の安定的な移行が広く実現してきたが、昨今この「戦後日本型循環モデル」は徐々に崩壊してきている（本田 2014）。またこのような揺れ動きが社会全体の個人化や流動化をも促進することで、若者の移行過程も複雑化しており、あらゆる個人にとって「自分固有の人生（a life of one's own）」を営んでいく必要性が高まりつつある（乾 2010）。

そしてこのような社会変動の影響の下で、今日の若者が従来の「自立」のメルクマールを獲得することはより一層困難なものとなっている。すなわち、これまでの社会において一般に想定されてきた「学校卒業、初就職、経済的自立、離家、結婚、親になること」といった「自立」を象徴するライフイベントの実現可能性が縮減していくなかで、成人期への移行の試行錯誤を繰り返す「ポスト青年期」なるライフステージが拡大してきている（宮本 2005）。

したがってこれまでの社会政策では、教育や雇用から排除され実存的な不安を抱える若者を社会包摂政策の対象と据えることで、彼らの「自立」を支えていくことが広く目指されてきた（樋口 2004）。言い換えればこれらの社会政策は、若者の「学卒、就職、離家、独立世帯形成、結婚・家族形成などのステップを支える社会経済環境を整備すること」（宮本 2012: 45）を目的とし、特に彼らの就労達成に期待する支援施策を広く展開してきた（児美川 2010）。これらの施策は、移行の危機に陥る若者の「自立」を支えることにきわめて大きな支援意義を果たしてきたといえる。

ただ一方でこれらの政策や社会認識は、「自立」のメルクマールの獲得を通じた移行の実現を自明視することにより、その他の多様な移行パターンの存在を等閑視してきた可能性がある。この点に関して益田（2012）は、今日の社会が「構造として不安定な雇用を一定数必要としつつも、規範面ではそれを引き受ける主体を許容しない／しえない」ために、その非正規雇用労働者に対しては、「労働による自立を果たして一人前」という規範的価値観（労働倫理）が生む軋轢を主体レベルで解消するよう要求しているのだと指摘する。またフリーターという生き方が、非正規雇用を経験する若者にとっても首肯しがたいものとなっている実態も見出されている（山口・伊藤 2017）。上記の研究にも示されるように、一般に想定される「一人前」の「自立」が未達成である状況とは、若者の主観性に否定的な見解を与えうるものであり、またそのような経験は彼らのライフコースにおけるリスクとしても認識されるものとなっている。

重ねて不安定な移行期を過ごす若者のリスクは、その家族にも背負われる実態が見られる。これまでの日本社会では、若者の「成人期への移行のセーフティ・ネットは制度的にも

社会慣習的にも親（家族）に期待されているという状況がある」（宮本 2018: 63）り、また個人の主体的選択や自己責任が強調されるようになったことに伴って、子どもの「進路選択や就職に際してかつて以上に親たちの関与と責任を求める」という「家庭責任の増大」が生じるようにもなっている（喜多 2011: 167）。加えて武川は、一方で個人化への対応を徹底してこなかった公共政策の結果により家族が、「グローバル化と個人化の緩衝地帯としての役割を果たすこととなり、「移行の長期化」に伴う「育児の長期化」という「家族戦略」が、「経済的・象徴的な利得を短期的に高めるものとして」機能している実態があると指摘する（武川 2013: 47-48）。これらの知見を踏まえても、若者の移行や「自立」の過程には、親の「育児」や「家族戦略」が不可分のものになっているといえる。

しかしながら以上の先行研究の知見を踏まえれば、今日の若者が「自立」することに関して、大きく2点の課題を指摘することができる。第1に、従来型の「自立」の実現を求める社会の在り方は、今日の「自立」の当事者となる若者や家族の現在性を肯定するものであるといえるだろうか。事実、昨今の社会構造の転換は個人による多様なキャリアの成立を促しており、従来型の「自立」の実現可能性も大きく減少しつつある。したがって従来型の「自立」やその「家族戦略」の責任を追及する社会の在り方は、一定数の当事者の不安や葛藤を増幅させるものとなり、ひいては彼らの現在性を大きく否定するものとなりうる。従来の象徴的なメルクマールの獲得を通じた「自立」を殊に期待する社会認識の有効性や合理性は、親をも含む当事者の社会的文脈や主観的認識を詳らかにすることを通じて、再考される余地があるといえる。

第2に、昨今の日本社会における若者のキャリアの多様化を前提とすれば、従来型の「自立」を称揚するに留まらない、若者の多様なキャリアを肯定・承認しうる「自立」観を提起することの重要性も高まっているといえるのではないだろうか。換言すれば、当事者の有機的なキャリア形成に資する「自立」観とはどのようなものであるかを、今日的な社会状況に基づき考察していく必要がある。そしてこれらの観点から見出される新たな「自立」観とは、当事者の多様な現在性を承認し、彼らのキャリアに肯定的な解釈を加えうるものとなることが想起される。

そこで本章では上記の課題を探索するため、子ども（高卒パネル調査対象者本人）の「自立」についての不安や葛藤が表現されることとなった3組6名の親子の語りを取り上げ、これら3組の親子が子ども（あるいは対象者本人）の「自立」を当事者としてどのように捉えているのかを確認していく。また親と子それぞれの「自立」観に着目する際には、親の「子育て」についての語りや、子ども（対象者本人）による将来の見通しについての語りにも焦点を当てる。そしてこれらの作業から、当事者の不安や葛藤を煽る従来型の「自立」観を再考し、当事者の多様なキャリアを承認しうる「自立」観を提示することを目指す。

なおインタビュー調査実施時の対象者本人（若者自身）の詳細は表1の通りであり、3人

の対象者本人は未婚の男性であることや、親と同居していることに共通点がある。また彼らの学校歴や職歴には多様な移行過程が描かれており、第 2 節で参照する斉藤さんと水野さんの 2 組の親子には現状や将来に対する不安や葛藤が吐露されることとなっていた。一方、第 3 節で参照する小林さん親子には、不安定な状況にも否定的な見解を加えない「自立」観が示されることとなった（それぞれ、仮名）。

図表 1 インタビュー調査実施時の対象者本人（若者自身）の状況¹

インタビューした親子 (3組)	対象者本人（若者自身）の状況			実施日
	学校歴	学校卒業後の職歴	年齢	
斉藤亮介さん 斉藤博子さん（母親）	大学(中退)→ 職業訓練学校(卒業)	正社員(警備員:3年)→ 正社員(介護士:2年目)	28歳	2013年12月 2013年12月
水野隆史さん 水野昌行さん（父親）	公務員試験対策の予備校→ 専門学校(卒業)	正社員(看護師:1年半)→ 正社員(看護師:2年目)	29歳	2014年12月 2014年12月
小林和弘さん 小林圭子さん（母親）	専門学校(中退)→ 専門学校(在学中)		32歳	2017年8月 2017年8月

2. 本人の「自立」をめぐる不安や葛藤——2 組の親子の語り

(1) 斉藤さん親子の語り

本節では、斉藤さんと水野さんの 2 組の親子の語りから、両者の親子が抱える不安や葛藤を把握していく。

斉藤博子さん（斉藤亮介さんの母親）は、「子育て」について「一応は責任は終わったかなって感じはして」と語るも、現在の亮介さんの生活リズムが乱れている様子に大きな心配を抱えている。

R 1：実際に成長された息子さんを見てどうですか。

斉藤（母）：なかなか難しい。やっぱり。例えば親と一緒にいれば、朝も起こしてもらうとかご飯も作ってもらうから、もう生活すべてに対してほんとは自立してほしかったんだけど、なかなかそこまではいかなくって。まだまだそういうのは子どもだなみたいな。私たちも子ども扱いしてるのかなとは思んですけども。

R 1：自立っていうと色んな面であると思うんですけど、就職もされてるのもう 1 人で暮らしてほしいとか、そういったお考えもあったりしますか？

斉藤（母）：もし何の心配もないならそうしたらいいんじゃないかなとは思ってますけ

¹ インタビューは親と子のそれぞれに実施しており、インタビュアーもそれぞれ異なっている。

ども、やっぱり1人になったときに、食生活とか日常生活、例えば夜遅くまで起きて、今度反対に夜と昼が逆になるんじゃないかなとか、そんなことを考えるとまだちょっと無理だなみたいな。いつになればできるのか分からないんですけど、本人も多分あんまりそんなふうに思っていないかなとは思いますが。やっぱり人間の生活する中で大事なリズムとかそういうもの、今の人たちってあんまり重要視してないけども、そういうのってやっぱり必要かなって思っているので。

R2：なかなかお聞きしていると勤務時間がちょっと不規則な面もあるので。

斉藤(母)：わざとそういうの選ぶんです。「ほんとは夜勤ばっかの仕事が良かったんだけどなかった」とかって言って。

博子さんは、亮介さんの「食生活や日常生活」が乱れてしまっていることから彼の毎日の生活をサポートしており、亮介さんの「生活すべてに対」する「自立」は「なかなかそこまではいかな」と述べている。ゆえに彼が「1人になったときに」も、「人間の生活する中で大事なリズム」を整えていく必要があると考えている。なおこのような認識のもとで、本来なら亮介さんにしたくない口出しもすることがあるといい、「それも一応子育てだと思ってる」と語る。

ただ、亮介さんの生活リズムの乱れには彼の就労状況の影響が深くかかわっていることも理解される。亮介さんは、前職の警備員の仕事で「夕方から朝9時まで」のシフトをこなし、また現職の介護士の仕事でも主に「昼過ぎから深夜0時まで」と「(深夜)0時から朝まで」のシフトに従事しているというが、このような就労状況に左右される彼の生活リズムが、親の思う「自立」とは乖離するものとなっていることが把握される。重ねて博子さんも、このような就労状況から被る制約を同時に理解しており、亮介さんの生活リズムの改善を期待しつつも、そのような仕事を選ぶ亮介さんの姿にジレンマを覚えている様子がうかがえる。

一方で亮介さんは、高校卒業後に大学へと進学したものの、専攻の内容が「うまくマッチングしなかった」ことなどの理由から3年半で退学をし、また同時期には統合失調症の診断を受けたことを語る。ただ比較的軽かった症状は服薬で改善していき、現在は1度の転職を経て正社員の介護士として働いている。なお学生時代を含めた自身の生活においては、様々な面で家族からの支えを受けていることも実感している。

そして亮介さんは、近い将来の見通しや中期的な目標は「あんまりない」と述べ、一人暮らしや結婚などの予定や希望もないという²。ゆえに亮介さんは10年後の生活も、「その日

² なお亮介さんの結婚などについての認識は、2013年(wave10)の質問紙調査の自由記述での回答に浮かび上がる。亮介さんは、2年目となる「現職(介護士)は残業や過酷な

を毎日暮らしてこんな（現状の）ような感じなんだろう」と語る。しかしながら遠い将来への「漠然とした」不安については、以下のように吐露している。

R 1：先ほどからあまり悩みは今ないっていうふうにおっしゃってますけど、遠い将来についての不安というのも特にはないですか。

斉藤：漠然としたものしかないですね。

R 1：漠然としたものは何か、どんなものですか。

斉藤：何て言うのかな。年取ったときに金があるのかなあ。何とかできる金があるのかなあっていうのと、その金があっても、自分の意志が保てなくなったとき、今働いてるようなことになったときに、意というか、自分の意に沿ったようなことになれるか（＝をできるか）どうか。僕自身が、現状の職場のところで入居したくないよみたいな面も多少あるんで、僕はなるべくそれはなくなるように働いてはいますけども、全ての人がそういうふうな考えにはなかなか至るって、僕も1年の新参ですし、そこまでどうせい、こうせいって言えるあれではないんですけども。僕は、僕個人としてはそういうふうにならないようにはしてるんですけども、そういうふうな輪っていうか、考え方が広まればなあ、いずれ自分も世話になるっていう考えが広まればいいなあ。逆に言うと、そうじゃない限りは、今のまんまでいくら金持っても、そういうところに入れられたらおしまい。おしまいと言っちゃ言いすぎですけども、ちょっと不安だな、そういう意味で不安だなんていうのがありますね。それまでその金が残るかどうかっていうのもあるんですけどね、多少は。ほんとにその先の先ですね。終わりの話ですよ。終わりの話ですよ。

R 2：そうですね。今の話はね。

斉藤：中期的にはあるのかな。中期的には何かあるのかな。あんまりないですね。考えてないですね。

亮介さんは、将来の生活において「何とかできる金があるのか」どうかを不安視しつつ、「自分の意志が保てなくなったとき」に「自分の意に沿ったような」生活がなしえなくなることへの懸念を示しており、またそれは介護施設で働く自身の経験からも想起されるものとなっている。言い換えればこれらの語りにおいて、将来的な生活が毎日「こんなような感

日程もなく満足」だと述べるが、「ただし、結婚、子供を作ろうと思わない事。切りすてる物をハッキリさせておくと、充実して過ごせます」と付言する。またこのような認識から亮介さんは、介護士である間に趣味の旅行にも多くの時間を使うなどして、プライベートを充実させている。

じ」ではありえなくなることへの漠然とした不安が表現されていると捉えることができる。しかしながら亮介さんは、このような不安を抱えつつも、比較的近い将来の見通しは持てないでいるという。

(2)水野さん親子の語り

上述のような「自立」への不安は、水野さん親子の語りにも見出される。水野昌行さん（水野隆史さんの父親）は「子育て」に関して、隆史さんから毎月「給料の半分ぐらい」を受け取りながら彼のガソリン代と交遊費以外すべての生活費を管理している現状に触れつつも、隆史さんが働いて「親からお金が出ないっつうのは（子育ては）終わったようなもん」だと語っている。

水野（父）：俺は、ある程度、自分で働いてやってるっつたら、ちょっとおかしいんだけど、管理はこっちでやってんだけど、やっぱ親からお金が出ないっつうのは（子育ては）終わったようなもんでねえの。

R 1：それは、いつの時点で、そういうふうにお感じに？

水野（父）：ほとんど就職が決まって、ある程度給料、他からいただいてくるっつうあたりからは。

また昌行さんが子育ては「一段落したのかな」と認識するのには、隆史さんが看護師資格という「食いつばぐれない免許も持ってる」ことの安心が大きくかかわっている。

しかしながら昌行さんは、「親がいなくなってもある程度自分でできるように」なることをその子育ての目標としてきたために、その点で現在の隆史さんはまだ「自立できてねえ」と捉えている。

水野（父）：とにかく最終的に親より後に生きてるもんだから、その親がいなくなったときに俺どうすっぺやって思うような子育てだけは、ずっとしたくないなと思ってたから。自立できるっつたら今、自立できてねえんだけど、親がいなくなってもある程度自分でできるようにっつうのだけはね。

加えて、隆史さんがいつまでも「親掛かり」でいるよりは結婚「してもらった方が親も安心だ」と考えており、その決断は「本人次第だ」と語る。ただ一方で隆史さんの結婚の実現が遠のいているのには、親子の居住する A 地区に「就労する場所がない」ことや、隆史さんと同年代の若者が「全部、外に出てしまっ」たことの原因があるとも指摘される。

水野（父）：いや、それ（結婚）は早くできるのであれば、してもらった方が親も安心だからさ。何もかにも親掛かりより、結婚すれば2人してやる部分もかなり出てくっと思うんですね。そうは思うんだけど、なかなかね。これだけは本人次第だから。

R2：そりゃそうですね。周りが言っても。言うともた。

水野（父）：昔みたく、そして仲人さんとか何とかがいて一生懸命になってやるつつうような時代でないし。して、この年代の子どもたちが少ないのね、基本的に。

R2：この地域ですか。

水野（父）：全部、外に出てしまって。【A地区】に残って仕事してるつつうのは本当に限られた人たちなんです。何せ就労する場所がないから。

さらに昌行さんは、A地区の「付き合い」や「出会いの場」が消失してしまっている現状にも憂いを抱いており、重ねて今の隆史さんが「自分から飛び込んでって」新しい人間関係を増やすこともできていないと述べる。

水野（父）：要するに我々の年代だとさ、上でも下でもある程度（付き合いがあった）。（しかし隆史さんの世代は、）あんまり上との付き合いがねえんだべね。だから俺の娘もそうなんだけども、職場さ今行ってっから結構上の人たちとも付き合いあんだべけども、要するに自分から飛び込んでって、上の人たちのところに何とか何とかつつうのはないんだよね。やっぱり出会いの場が限られてんのさ。その中で探すとなつとさ、無理だと思うのね。

R2：なかなかね。

水野（父）：色んな所さ出張っていけばこそ、多少は出会いの場があるんだかもしんねえけども。どうしてもこの年代の子どもたちつつうのは同級生との付き合いが多いんだよね。我々のときは先輩だのなんかも結構付き合いがあったったしさ。色んなサークル活動もあったっだしね。今そういうのもないしょう。だから、やっぱり出会いの場が少ないんだべね。

一方、専門学校を卒業後に看護師として病院に勤めていた隆史さんは、現在は転職を経て介護施設で看護と介護の仕事に携わっており、前職から給料はある程度減少したものの、「職員同士の関係」が「非常に居心地の良い場所」であることに満足していると語る。

また現在の生活についても、「相当、今恵まれている」と感じており、長らく「家の庇護っていうか、両親から色んな援助を受け（ら）れる状況」にあると述べる。しかしながら、この状況が「やっぱり長く続くとはいえない」ために、「その前に何とかしなくちゃいけない

い」と考えている。そして、このような今とは違う将来像を模索しなければならない現況は、隆史さんに「漠然的な不安」を与えているという。

R 1：希望とは、またちょっと違うところで、逆に将来に関して不安っていうか、「どうなんのかな」っていうのとかはあったりしますか？

水野：こんな感じで続けていけねえだろうなと思うんで。このままじゃいけねえなとは思ってますけど。

R 1：こんな感じというのは？

水野：相当、今恵まれてる。恵まれてるっていう表現変ですけど、とりあえず食べるのには困らない状況にいるんですけど、こういう状況がずっと続くようには思っていないので、さすがに。その前に何とかしなくちゃいけないなと思うんですけど。

R 1：それは具体的には独り暮らしをするとか、そういうことですか？

水野：いや、結局、家に居ると何かあっても家の庇護っていうか、両親から色んな援助を受け（ら）れる状況にあるんで、その状況に今、完全に、何年間もですけど甘えちゃってるわけで。私もそれが、やっぱり長く続くとは思えないんですよ。当然、親も年齢上がってきますし。なんで、どうしようかなと。何か考えてるところ。考えるっていうか、それはやっぱり漠然的な不安としてあります。

なお上記のような現状認識の下でも、隆史さんにとって自身の将来の指針を見出すことは難しく、「いつか今より良く変わっていったるようには思いたい」と語っている。

加えて隆史さんは、かつては実家を出ることを考えたものの、今はそのような希望は「特にはない」と語り、重ねて結婚についても「ここ3年ぐらい」は「多分駄目だろうな」と感じられるようになっている。またこのような結婚への意識の背景には、「お金の面」を始めとする様々な面で、誰かが「1人自分の隣に増えると、もうやってけねえかなっていう」思いがあるのだと言及している。

水野：（専門学校卒業後に最初の病院に勤め）ていて何年ぐらいかな。そのときは若干（結婚したいと）思ってたんですけど。だから今になってはあんまりもう。結婚しても、しょうがねえなあみたいな。いや、良くないですよ。

R 1：（結婚）してもしょうがないなとかっていうふうに思われるのは、どういうことで？何か事情があったり？

水野：事情があったからじゃないですけど。多分、誰か例えば1人自分の隣に増えると、もうやってけねえかなっていう気がします。お金の面でも何でもそうですけ

ど。誰かが隣に伴侶として迎えるっていうか考えられないような感じですね。
(そう感じられるように) なってきましたよ、なんか。ちょうどそれ、最近ここ
3年ぐらいですか。いても面倒も見れねえし、多分駄目だろうなって。

R1：それは、お仕事が忙しいから？

水野：いや、そういうんじゃないんですけど。何なんすかね。よく分かんないですけど。

(3)小括——2組の親子に示される不安や葛藤

上述の2組の親子の語りをまとめれば、親は「子育て」が終わったことを一定程度認識するも、親から独立した後の子どもの不安定な社会生活をも同時に想起することから、子どもの「自立」がまだ実現していないことを憂慮している。加えて親は、今後の子どもの生活を成り立たせるための生活リズムの改善や結婚などを期待しているが、本人の就労状況や居住環境などから被る制約により、それらの期待の実現が困難であることも同時に理解している。

一方でその子ども(若者自身)は、家族に支えられた現在の生活に一定程度の安定を感じつつも、その生活が維持できなくなる将来をも予期することから、将来に対する漠然とした不安を感じている。しかしながら、今の生活では自身の結婚や離家なども期待することができず、今後「何とかしなくちゃいけない」という現状認識に対しても明確な打開策を見出ずにいる。言い換えれば、これからの生活において将来の不安を解消するための自身の「変化」が求められていることを自覚しつつも、従来型の「自立」のメルクマールの獲得を想起することは難しく、現在の生活を続ける以外の具体的な選択肢も模索し難い状況があると捉えることができる。

3. 見出される「自立」への契機——小林さん親子の語り

前節では、現状を不安視しつつ安定的な将来像や「自立」を想定することが困難となっている親子の実態が把握されたが、本節では、これまで抱いてきた「自立」への不安を払拭するようになった小林さん親子の語りに着目し、本人の不安定な状況にも否定的な見解を加えない「自立」観を確認していきたい。

小林圭子さん(小林和弘さんの母親)は、和弘さんが突然の体調不良により中学校に通えなくなってしまった過去があったことを語り、彼の体調不良の原因をこれまでずっと把握しきれなかったことが、一番の子育ての悩みであったと述べている。

R1：子育ての中ですごく悩まれたこととあって、あたりさわりましたでしょうか？

小林(母)：やっぱり、今言ってた中学校2年ぐらいから、ちょっと体調、すごく崩して
しまったので、学校に行けないとか、色々あったものですから。何の原因かっ

て、気持ち悪いのとかが、体がだるいのが、どういう原因かっていうのが分からなくて。ずっと色々な病院に、色々な所に行ったんですね。そういうことが一番、悩みでしたかね。

また圭子さんは、かつての和弘さんの体調不良の原因には彼に勉強やサッカーなど「何でも一生懸命させちゃった」ことがかかわっていたのだと考えるために、和弘さんの体調を悪化させたことについて、「そういう負い目がずっと続いて」いたのだという。加えてそのような和弘さんへの「負い目」が、これまで圭子さんの「子育ての悩み」を増幅させていたこともうかがえる。

小林（母）：それまで順調にあって、何でも一生懸命やる子だったので、勉強もじゃあ「一生懸命やれば」って（言って）、サッカーも本当に「一生懸命やれば」って（言って）、やらせ過ぎちゃって、ついつい私が、これもこれもって言ったのが原因で。一度熱みたいの出ちゃって調子悪くなったこともあったので、それがずっと続いてたもんですから、自分としてはすごくそれが負い目っていうか。

（略）やっぱり、上の子だったもんですから、何でも一生懸命させちゃったんですね、私も。で、そういう負い目がずっと続いてて。それが一番、子育ての悩みでしたね、ずっと。

ただその上で圭子さんは、最近になって和弘さんの医療機関にかかる頻度が大きく減少したことや、彼の体調が良好化していることが「救い」であると述べ、「一安心」することができたのだと語る。またこの点において圭子さんは、これまで「長い子育てが続いていた」のだとも言及している。

小林（母）：早く治らないっていうのもあるし、自分がそういうふう原因にして（＝なって）しまっ。かわいそうだったなっていうのが、ずっとあったので。で、今はちょっとね、どうにかあんまり、もうお医者さんも、まるっきり切ってはいないんですけど、心療内科のお薬も飲んでないです。で、すごくこう、ああって体調悪くてっていうこともなくなったので。それだけでも私は救いというか。

R 1：お母さまとしては一安心という。

小林（母）：はい、一安心。長い子育てが続いていたんですね、そういう面では。はい。

重ねて圭子さんは、「今の世の中」では若者のライフコースに「平均っていうのがなくな」ったために、それぞれの生き方を「別に私は比べない」と語る。またこのような理解のもと

で、和弘さんのライフコースを「変則的な何ともいえない」ものであると表現しつつも、そのような生き方を肯定的に捉える認識が示されている。

小林（母）：うちはこんなもう、変則的な何ともいえない、おかしなうちなので。まあ一般的にはもうね、孫がいても全然おかしくない（笑）。もうでも、別に私は比べないです。もう今の世の中でね、比べててもね。あの、平均っていうのがなくなりましたよね、皆さんもう色々なので。それでいいなと思って。元気でやれば、どうにかかかって。

それでは一方で和弘さんは、現在の生活や将来の見通しをどのように捉えているのだろうか。現在、看護師養成の専門学校に通う和弘さんは、これまで長い間体調が優れず、最初に通った専門学校も体調不良を理由に中退した過去があるが、これまでのアルバイト生活や今の学校生活のなかで、体調面を考慮した「自分の中のリズム」を徐々に掴んでいっていることについて言及している。

R 1：学校生活であるとかアルバイト生活とかで、「ああ、こういうリズムが得意だなあ」みたいなこと、思われたりしたんですか？

小林：こう何か、多分自分はある程度忙しい所のほうが好きで、やっぱ何かに夢中になるのが、自分、体調面もあまり考えずできたと思うんですよね。で、やっぱ体調が自分が悪かったときでも、サッカーの試合とかを少しやらしていただくと、そのことだけに集中できて、やっぱ体調が悪いなりにもそれには、まあ少し短い時間とかでしたけども、考えずできたので。で、やっぱりその、あまり長い、何て言うんですか、何も考えないで、ずっといる時間とかが自分の中で苦痛で、何か色んな、嫌なことであったり、体調のこととか考えちゃうので。ある程度、こう決められた、何て言うんですかね、スケジュールじゃないっすけど、何か決まったことの方がパッパッパッとできるので、それも自分の中のリズムが良いのかなっていうのもありますねえ。で、やっぱり病院のとか実習とかをさせていただいて、治療がもう安定してる方とかと接すると、自分、こう何して良いのか分からなくなったりとかなんで、すごい混乱してしまって、どうしようって困って。んでまあ、自分の勉強不足とかもあると思うんですけど、このまま、普通に長い時間、何もしないで過ごしてて良いのかなあとか思うよりは、やっぱりその、色々、大けがした後の人とか、色々チューブとかがささってるので…、チューブ点検とか…、

R 2：点滴の針がちゃんと入ってるのかとかね。

小林：とか。そういうものがあるので、そういつてすぐ、患者さんのすぐそばとか、行って見る方が良いのかなあってというのは思ったので。

和弘さんは、「ある程度忙しい」状態や「何かに夢中にな」れる状態であると「体調面もあまり考えずできた」と感じられるようになっており、また現在の生活ではそのような「夢中になる」時間があることについても触れている。重ねて、「何も考えない」時間や何かに打ち込めない時間には「苦痛」を感じるのだといい、そのような場面では「色んな、嫌なことであったり、体調のこととか考えちゃう」のだと述べる。ゆえに和弘さんは、ある程度定まったスケジュールをこなしていくことが「自分の中のリズムが良いのかな」と感じられるようになっている。

またそのような「自分の中のリズム」が掴めてきたことにより、現在の学校生活での環境の変化にも適応できるようになっていると述べる。和弘さんは専門学校入学時、「環境の変化」に伴う体調の悪化に苦しんだというが、現在では「自分が全部、完璧にやるって思わなくなってきた」ことで、周囲との関係性を徐々に構築していくことができ、また「休息のバランス」も折り合いのなかでつけていくことができていると語る。加えてこのような生活のなかで、「ふっと気持ちが楽になった」のだとも指摘する。

そして和弘さんは、上述された斉藤さんと水野さんの語りに比較しても今後の自身の将来の見通しを具体的に表現しており、30代での目標について以下のように述べている。

小林：そうですね。まあやっぱり 30（歳）になって、ようやく自分がこう、やりたいことというか、少しずつですけど体調も良くなって目標ができてきたので、まあ、これを維持できるように、頑張っていきたいなってというのはありますね。で、せっかく、こう自分を、こう助けてくれた方がいらっしゃるっていう。

R 2：例えば？

小林：まあ、やっぱり親であったり。まあ家族、弟も少なからずとも（助けてくれたと）思ってたです。まあ、そういう人に恩返ししていきたいなっていう。

R 2：うんうんうん。できますよ。家族は本当ねえ、支えてもらったからねえ。何が恩返しになりますかね。

小林：そうですね。やっぱり、まあ、自分が元気に働いてくところを見せるっていうのが一番良いのかなってというのは思いますね。まあお金も大事で、生活してくっていうのも大事だと思うんですけど、まあずっと、こう見てきてくださってるものですから。まあそれをこう、何ていうんですかね、見せるのが一番良いのかなあ

和弘さんは、改善されてきた体調を維持できるよう「頑張ってい」くことを今後の目標として示しており、またこれまで体調が不安定な時期に助けてくれた人たちに「恩返ししていきたい」という思いがあるのだと語る。ゆえに和弘さんは、家族を始めとする「助けてくれた」人たちに、「自分が元気に働いてくところを見せるっていうのが一番良いのかな」と述べている。

4. まとめと考察

(1)従来型の「自立」への不安と、「認識論的誤謬」

これまでの社会においては、従来の象徴的なライフイベントの達成をもって若者の「自立」を捉えてきた実態があり、社会政策もそのような若者の「自立」を強く期待してきたが、第2節での2組の親子の語りからも示されたのは、従来型の移行モデルとは異なる子ども（若者）のキャリアが「自立」したものとして見なされず、親と子が安定的な将来像を見通すことが困難となっているという状況であった。また親は、今後の「自立」に向けた子どもの生活リズムの改善や結婚などを期待しつつも、そのような「自立」が子ども（若者自身）の就労状況や居住環境といった社会的要因によって阻害されるものとなっていることも同時に理解していた。重ねてその子ども（若者自身）も、将来への不安を払しょくするための自身の「変化」を自覚しつつも、従来の象徴的な「自立」のメルクマールの獲得は想起しづらく、また今後の具体的な社会生活の指針も持ちにくい状況にあった。

そしてこれらの結果を踏まえれば、従来型の「自立」を期待する社会認識が当事者の不安や葛藤を増幅させるものとなり、ひいては彼らの有機的なキャリア形成に資するものともなっていない実態を指摘することができる。この点に関してファーロングとカートメル（1997=2009）は、客観的な機会の平等が担保されない状況下での人々の失敗や頓挫を個人的な不足に帰結させるような認識の在り方を「認識論的誤謬」と呼び、個々人の責任のみを強調する認識を批判している。したがってあらゆる若者による主体的な「自立」の実現を志向する際には、その「自立」を期待する今日の社会認識や社会政策のうちに「認識論的誤謬」が生じている可能性を問い直し、それらを当事者にとっての「自立」の実現に資する社会資源へと変換させていくことが求められる。またこのようなアプローチとは、様々な社会変動を経験し続ける昨今の日本社会においてこそ有効なものであるといえるだろう。

(2)当事者の多様なキャリアを承認する「自立」観の提示

「認識論的誤謬」に陥ることのない社会認識や社会政策の転換が求められるなかでは、従来までの「自立」観そのものにも更新の余地が生じうる。またこの意味において、象徴的な「自立」のメルクマールを獲得せずとも現状を「問題」があるものとは捉えず、自身や家族

の将来像を明示する小林さん親子の「自立」観（第3節）は、従来までの「自立」観の転換にきわめて重要な示唆をはらむものであった。小林圭子さんは、これまで和弘さんの「子育て」に「負い目」を感じ、葛藤してきた過去を示しつつも、和弘さんの体調が改善しつつある現状に「子育ての終わり」を認識していた。一方で和弘さんは、現在の生活のなかで自身の体調面を考慮したリズムを掴んでいっていると同時に、これからの生活での目標を具体的に表現していた。そしてこれらの語りから見出される「自立」観とは、従来の象徴的なメルクマールの獲得を通じた「自立」の在り方を相対化し、自身や周囲の現在性を積極的に承認していくものであるということが把握される。

以上より本章では、「認識論的誤謬」を克服するための社会認識として、今日の若者が歩む多様なキャリアを承認し、彼らの多様な将来像をも肯定していく「自立」観の必要を強調したい。今日の日本社会においては、若者が「自分固有の人生 (a life of one's own)」を営んでいく必要性が高まっているが（乾 2010）、その当事者にとっての「自立」とは、彼らの「自分固有の人生 (a life of one's own)」を比較することでなく承認することによってこそ実現するものとなっている。ゆえに、若者のキャリアの“固有性”に肯定的な解釈を加え、彼らに固有の将来像の構築を動機づける「自立」観にこそ、当事者の「自立」を支える社会資源となる可能性が見出されるはずである。

（小山田建太）

引用文献

- 樋口明彦, 2004, 「現代社会における社会的排除のメカニズム——積極的労働市場政策の内在的ジレンマをめぐって」『社会学評論』第55巻第1号, 2-18.
- Furlong, Andy and Cartmel, Fred, 1997, *Young People and Social Change* second edition, Open University Press. (=2009, 乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸山妙子訳『若者と社会変容——リスク社会を生きる』大月書店).
- 本田由紀, 2014, 『社会を結びなおす——教育・仕事・家族の連携へ』岩波書店.
- 乾彰夫, 2010, 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち——個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店.
- 喜多加実代, 2011, 「子どもの「主体的進路選択」と親のかかわり」石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子編著『格差社会を生きる家族——教育意識と地域・ジェンダー』有信堂高文社, 147-168.
- 児美川孝一郎, 2010, 「「若者自立・挑戦プラン」以降の若者支援策の動向と課題——キャリア教育政策を中心に」『労働研究雑誌』No.602, 17-26.
- 益田仁, 2012, 「若年非正規雇用労働者と希望」『社会学評論』第63巻第1号, 87-105.
- 宮本みち子, 2005, 「先進国における成人期への移行の実態——イギリスの例から」『教育

- 社会学研究』第76集, 25-39.
- , 2012, 「成人期への移行モデルの転換と若者政策」『人口問題研究』第68巻第1号, 32-53.
- , 2018, 「若者の自立に向けて家族を問い直す」石井まこと・宮本みち子・阿部誠編著『地方に生きる若者たち』旬報社, 57-82.
- 武川正吾, 2013, 「家族戦略? ——個人戦略と公共政策の狭間で」『家族社会学研究』第25巻第1号, 43-51.
- 山口泰史・伊藤秀樹, 2017, 「分化するフリーター像——共感されない非正規雇用の若者たち」佐藤香編著『格差の連鎖と若者 第3巻 ライフデザインと希望』勁草書房, 133-156.

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトについて

労働市場の構造変動、急激な少子高齢化、グローバル化の進展などにもない、日本社会における就業、結婚、家族、教育、意識、ライフスタイルのあり方は大きく変化を遂げようとしている。これからの日本社会がどのような方向に進むのかを考える上で、現在生じている変化がどのような原因によるものなのか、あるいはどこが変化してどこが変化していないのかを明確にすることはきわめて重要である。

本プロジェクトは、こうした問題をパネル調査の手法を用いることによって、実証的に解明することを研究課題とするものである。このため社会科学研究所では、若年パネル調査、壮年パネル調査、高卒パネル調査、中学生親子パネル調査の4つのパネル調査を実施している。

本プロジェクトの推進にあたり、以下の資金提供を受けた。記して感謝したい。

文部科学省・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金

基盤研究 S : 2006 年度～2009 年度、2010 年度～2014 年度 基盤研究 C : 2013 年度～2016 年度 特別推進研究 : 2015 年度～2017 年度 若手研究 A : 2015 年度～2018 年度
基盤研究 B : 2016 年度～2020 年度 特別推進研究 : 2018 年度～2024 年度

厚生労働科学研究費補助金

政策科学推進研究 : 2004 年度～2006 年度

奨学寄付金

株式会社アウトソーシング（代表取締役社長・土井春彦、本社・静岡市）: 2006 年度～2008 年度

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズについて

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズは、東京大学社会科学研究所におけるパネル調査プロジェクト関連の研究成果を、速報性を重視し暫定的にまとめたものである。



東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト
<https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/>